

ちびっこ

錬金術師の 恩返し

3

るあか *ruaka*

vol. 81 無理無理芸人

フィン

クリスティーナの近衛騎士。
忠誠心が高く、職務に忠実。

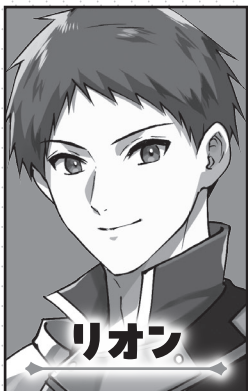
パーシヴァル

聖騎士団の団長。普段は
真面目だが、妹のエミリアの
ことになると暴走しがち。

エミリア

道具屋を経営している女性。
実はラインツ国王の
姪っ子で、王家の一員。

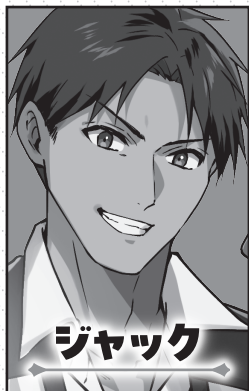
冒険者パーティ『黒豹』のメンバー



リオン



アイラ



ジャック

ジル

『錬成堂グランキャット』を
営む錬金術師。
不器用ながらも愛情を込めて
ノエルを育てている。

クリスティーナ

ザイラル王国の王女。
とある特別な力を持っている。

ノエル

本作の主人公。
病で命を落した少年が
幼児に転生し、今の姿に。
幼くても錬金の才能はピカイチ!

くろすけ

ノエルの相棒のしゃべる黒猫。
ノエルを一人前の錬金術師に
するべく、奮闘中!

登場人物
紹介

1話 新たな始まり

ここはラインツ王国の国境の町ブライア。すぐ隣の大国、ザイラール王国に近いこともあり、たくさんの冒険者が訪れる賑やかな町だ。

僕はノエル・グランヴィル。

家は『鍊成堂・グランキヤット』という、魔導具を扱うお店をやっている。

僕のお父さん、ジル・グランヴィルは鍊金術師で、ラインツ王国の公爵令嬢であるエミリアと一緒に経営しているんだ。

今から三ヶ月後、この町ブライアでも大きなお祭りが開かれる。

それは——『同盟記念祭』といって、ラインツとザイラールの間で結ばれた友好同盟をお祝いするお祭り。四年に一度開催されて、一ヶ月続くんだ。

色んなお店が並び、各国で活躍している旅芸人の一座が出し物を披露してくれる。

ブライアは普段から賑やかな町ではあるけれど、この一ヶ月間だけはどの都市よりもたくさんの人が訪れて、大陸中で一番賑わうと言っても過言ではないんだって。

僕は日本からの転生者で、前世は病室で寝たきりのまま人生を終えてしまったから、そんな大き

なお祭りなんてもちろん体験したことがない。

だから、僕もめっちゃ楽しみにしているんだ、同盟記念祭。

——だけど、今のままでは三ヶ月後の同盟記念祭では、悲劇が起こる。

隣国ザイラールのローベル・アイズフトっていう宰相がとんでもなく悪いことを考えているからだ。

これは、黒猫のくろすけから知った話だ。

くろすけは元はお父さんのお父さん、つまり僕のおじいちゃんであるゼオル・グランヴィルという人間で、ザイラール王国軍の元帥である偉大な錬金術師だった。

ローベル宰相は四年前にも同じことを企んでいたのだけれど、その時はくろすけが命がけでそれを防いだんだって。

でもそのせいで色々あって、今は魔力のない黒猫になってしまったんだよね。

ローベルはラインツ王国の最強聖騎士、パーシヴァルの身体を乗っ取り、大衆の面前でザイラール国王を殺害させようとしているんだ。

しかも、パーシヴァルはエミリアのお兄様であると同時に、国王直属の聖騎士団の団長でもある。この国にはなくてはならない存在だ。

僕もまたパーシヴァルにはお世話になっていて、大好きだし、そんな悲劇は起きてほしくない。そんなことを考えながら、僕はお店の二階の自分の部屋からブライアの町並みを眺めていた。

昨日までは普通の町だったのに、今日はいつも見かけない人たちがたくさん来ている。

「わあ、色んな人がたくさん！」

僕は身体を上下に揺さぶってキャッキヤとはしゃぐ。

『ノエルよ、もうすぐ四歳になるというのに、まだまだ落ち着きがないのう。いや、遂に準備がまったのじゃな、まあ、お主がはしゃぐのも無理はないか』

そう僕の頭の中に直接語り掛けてきて、僕の隣にちよこんとお座りしたのは、黒猫のくろすけ。僕は超能力が使えるから、くろすけとは念話で話ができるんだ。

「うん、同盟記念祭の準備が始まったんだね。あつ、見てくろすけ、リオンの父上と母上！」

仲良しの冒険者、リオンの両親を見つけたので、声を上げてしまった。

リオンは、アイラ、ジャックと共に『黒豹』という冒険者パーティを組んで、お父さんが錬金に使う素材を集めてくれている。

今はこの黒豹も一緒にこのグランキャットに住んでいるんだ。

ちなみに、リオンの正体はエミリアの護衛を務める近衛さんで、聖騎士様。

代々聖騎士を輩出しているブラックウエル伯爵家の次期当主だ。

リオンの父上も母上も王都の貴族街で暮らしているはずだけど、同盟記念祭の準備が始まったからその関係でこのブライアの町までやって来たのだろうか。

僕はここで、部屋の掃除をしてくれていた『魔導掃除機くろすけ号』を止めた。

僕が錬金術で作った自作の魔導具。

——そう、僕も錬金術師。師匠はくろすけ。

僕が錬金術を使えることは一部の人たちしか知らない。あんまり広まっちゃうと、悪い人たちに狙われるといけないからってお父さんに言われているんだ。

少し前、僕はたくさん錬金術の修業を積んで、『記憶の万華鏡』という貴重な魔導具を作った。

この記憶の万華鏡は、対象の記憶を別の対象の脳内に映像として投影する、言ってみれば、他人の記憶を体験できるというもの。

僕はこの魔導具を使って、ローベル宰相の企みをザイラール国王に告発したいんだ。

そのために必要なのは、ザイラール国王の娘であるクリスティナ王女の記憶。

なぜなら、彼女も四年前、くろすけと一緒にローベル宰相の悪事を見ているからだ。

でも、ローベル宰相が今も普通に過ごしていることを考えると、クリスティナ王女はローベルのことを誰にも言っていないか、言っても信じてもらえていないのだろう。

当時の彼女はまだ五歳、そんな子供の言うことなんて、信じてもらえなくて当然だからね。

だからクリスティナ王女に会って、こっちの事情を説明してから、一緒にザイラール国王に調見する。そうして記憶の万華鏡をザイラール国王に使って、彼女の記憶が真実だと証明すれば、ローベル宰相を断罪してもらえるかもしれない。

ただくろすけの記憶を魔導具で投影しても信じてもらえないだろうけど、クリスティナ王女の

記憶ならいけるはずだ。

これは、両国の平和と同盟記念祭の開催を守るだけじゃない。

くろすけの無念を晴らし、くろすけとお父さんの絆を取り戻すためでもあるんだ。

僕とお父さんには血のつながりはないけれど、お父さんは僕を大切に育ててくれた。

くろすけだって、僕のことをずっと側で見守ってくれる、僕の大切な——おじいちゃん。

——これは、そんな僕の、恩返し物語。

『むむ、ノエルよ、ジークベルト殿とドロテア殿が店に入っていくおったぞ。ワシらも挨拶に行くとするかのう』

「えっ、リオンの父上と母上が!? うん、行こう、くろすけ!」

僕はくろすけと共に部屋を飛び出すと、一階への階段を駆け下りていった。

2話 お祭りに向け

お店の一階に行くとお父さんとエミリアにリオンがいて、リオンの両親であるジークベルトとドロテアを迎えて談笑していた。

僕も久しぶりに会う二人に挨拶をする。

ブラックウエル家も同盟記念祭の準備を手伝うことになり、この町にあるブライア領主のお屋敷にしばらく滞在するんだって。

すると、ジャックが彼の両親を連れてお店に帰ってくる。

「おう、帰ったぞ」

「同盟記念祭の間、我々の栽培するナダ茶をこのお店に置いてくれるとのこと——」

「どうも初めましてグランヴィルさん、ジャックの母でございます。いつもこの子がお世話になっておりまして——」

お父さんに対して同時にしゃべりだすジャックの両親に、お父さんは「あははは……」とたじたじになっていた。

隣でエミリアもクスクスと微笑み、ジャックは深くため息をついていた。

ジャックの実家であるラドクリフ家は、隣国ザイラールの田舎町ナーダ村に住んでいて、そのの特産品である『ナダ茶の葉』を栽培している。

とっても栄養のあるお茶だけど、めちゃくちゃ苦くて前に飲んだ時に僕は吐き出しそうになっただよね……

でも、そんなナダ茶も大人、特にお年寄りにはすごく人気の健康食品。

それもあって、今回の同盟記念祭開催中、このグランキャットの道具屋で販売することになったんだ。ラドクリフ家はその準備でブライアの町まで来てくれた。

更に、同じ理由でもうひと家族も来るはずだけ——

カラン、コロソ。

あ、ほら。お店の呼び鈴を鳴らしながら入ってきたのは、アイラの家族、ツユシロ一家。

アイラ曰く、ラインツのド田舎である『シラナミの村』という漁村で宿屋兼酒場の『ツユシロ亭』をやっている。

アイラは一番上の長女で、その村から出稼ぎでこのブライアの町まで来てるんだよね。

「ただいまー。連れてきたよー」

彼女を先頭に赤髪がゾロゾロ連なって入ってくる。

順番に、とーちゃん、かーちゃん、一八歳のトーマ兄ちゃん、一五歳のリン姉ちゃん、一二歳のクーガ兄ちゃん、七歳の双子のニーナとルーナ。最後にじーちゃんとばーちゃん。

な、なんとか全員覚えられていた。

それにしても、お店の中が一気に狭くなったな……

ツユシロ一家は大家族で、とーちゃんとじーちゃん以外はみんなアイラと同じ赤髪なんだ。

シラナミの村はシラナミ料理という、いわゆる和食を扱っていて、同盟記念祭の間、その食材をグランキャットの目の前の大通りで販売するんだ。

集った黒豹の家族たちはそれぞれわいわいと挨拶を交わしていた。まだ準備の段階なのに、もうこのグランキャットの中はお祭り騒ぎだ。

僕も、ニーナとルーナに自作のくろすけのフェルト風マスコットをプレゼントすると、彼女らは「わーい、ノエル君、ありがと〜」と言って早速ベルトにマスコットを付けてくれていた。

ラドクリフ夫妻とツシロ夫妻、それからアイラのじーちゃんとぼーちゃんは明日には一旦故郷に帰ってしまうけれど、アイラの兄弟たちはしばらく向かいの宿屋に滞在することになる。

なんか準備の他にこの町でやりたいことがあるとかなんとか——

「では、私たちはブライア邸に戻ります。ブライア邸での手続きはこちらにお任せを」

ブラックウエル家はそう言って一足先にグランキャットを退出した。

「じゃあ、僕たちもザイラル城に向かいましょうかね」

お父さんが残った二家族へそう告げる。

同盟記念祭で露店や大道芸なんかの出し物を行うには、ラインツ側とザイラル側の双方に届け出をする必要がある。

ラインツ側への届け出はブラックウエル家が代わりにやってくれることになったから、僕たちはこれからザイラル側への届け出を行うために、ザイラル城へと向かうんだ。

両親たちは、今日そのために集まってくれたんだね。

とつても大所帯になってしまったけど、僕たちグランキャットのメンバーと、ラドクリフ夫妻とツシロ夫妻でザイラルの王都ザイディアを目指すこととなった。

アイラの兄弟とじーちゃんとぼーちゃんはブライアの町でお留守番だ。

「じゃ、俺ら、冒険者ギルドに登録してこよーぜ！」

そんなトーマ兄ちゃんの一声で、赤髪兄弟はゾロゾロとブライアの町に飛び出していった。

この町でやりたいことつて、冒険者ギルドのことだったのか。

つて、それにしてもまだ七歳のニーナとルーナも普通に付いていったけど、良かったのかな……

僕はそう疑問を抱えながらも、準備をしてお父さんに付いていく。

ザイラル城に行くということは、クリスティーナ王女とザイラル国王に会う初めてのチャンスだ。

ここで記憶の万華鏡を見せることができれば、全部解決なんだけど……

——なぜだか、そう上手くいくとは思えない。

そんな漠然とした不安を抱えながら、ザイラル行きの馬車へと乗り込むのであった。

3話 いきなり大チャンス？

——ザイラル城にて。

初めて入るはずなのに、初めてじゃない気がするザイラル城のロビー。

前に一度くろすけの過去の夢でこのお城を隅々まで体験していたからだ。

それにしても、くろすけの夢では鎧よろいやローブをまとった兵士やメイドなど、お城の関係者しかいなかったけれど、今は色んな人でひしめき合っている。

僕たちみたいに同盟記念祭関係の人たちが訪れているんだ。

既にこのザイラール城のロビーがお祭りの会場のよう賑わっており、大事な使命があるにもかかわらず、僕の心はウキウキと躍おどっていた。

『ノエルよ、分かっているか？ まずはクリスティーナ王女に会わねばならぬぞ』
そうくるすけの念を受け取り、ハツとする僕。

『あつ、そうだった。えつと、どうしよう。エミリアなら隣国の王族同士、接点があるかな？ それとも、元魔道軍大将まじどうぐんたいしやうのパパ？』

お父さんは実は元々はこの国で、魔道軍大将という、偉い立場にいたんだ。でも辞めちゃったらしい。

『む、そうじゃのう。ジルが軍を退しりぞいた理由が、とても前向きな理由だとは到底思えん。ここはエミリアにお願いしてみるとしよう』

『そっか、そうだね……よし、僕にまっかせて』

僕はくるすけと念話を交わすと、エミリアのワンピースをツンツンと引つ張った。

「ねえ、ねえ、エミリア」

「あら？ ノエル君、どうしたの？」

「エミリアって、クリスティーナ王女とお友だち？」

「クリス殿下……懐かしいわね。もうしばらくお会いしてはいいけれど、もちろんお友だちよ。

最後にお会いしたのが前回の同盟記念祭の頃だったから、今はもう八歳か九歳になられているのかしら」

エミリアはそう言っつてふふつと微笑んだ。

良かった、彼女の表情を見る限り、仲は良さそうだ。

「あのね、僕もクリスティーナ王女とお友だちになれる？ ご挨拶、できる？」

僕がそう言うと、隣で聞いていたお父さんが「おま……またすごいこと言い出したな……」と呆あきれた表情を浮かべていた。

「そうねえ、私も久々にご挨拶したいし、どのみち陛下にはご挨拶をするつもりだったので、ノエル君も一緒に行きましようか」

「うわーい！ やったーい！」

万歳をして喜ぶ僕。国王にも会えるなんて、いきなり大チャンスだ。

「うっ、マジか……ノエルが謁見して俺が謁見しない訳にはいかないよな……はあ、気まずいけど俺も行くか……」

お父さんはがっくしと項垂うなだれた。

「あう、パパ、ごめん……おーさまと、喧嘩けんか中？」

「いやいや、陛下とは喧嘩なんてしてないさ。けど、まあ、軍を抜ける時も会えずじまいだったからな。陛下に黙っていなくなっちゃまって、申し訳ないっつか、なんっつか……なんにせよ、ノエル、お前が気にすることじゃないさ」

お父さんはそう言っただけで笑った。

「えっ、おーさまに、お別れしなかったの……？」

「まあ……まあ、これは大人の事情ってやつだ」

お父さんは気まずそうに言う。

「その件も陛下に一度ちゃんとお伝えしなくてはですね。では、グランキャットのお店の件は……」
エミリアがそう言うと、アイラが名乗り出た。

「ああ、アタシ、やっどくよ。グランキャットは、同盟記念祭の間も通常通り営業しますって、申請を出せばいいんだろう？」

そうか、ナダ茶とシラナミ食材の申請だけじゃなくて、グランキャット自体の申請も必要だったのか。

「ええ、ありがとう、アイラさん。では、アイラさんにお任せして私たちは玉座へ向かいましょうか」

「だな。アイラ、ありがとう、頼んだぞ」

「はいよー、いつてらっしゃい」

アイラに手続きの諸々をお願いで、僕とくろすけ、そしてお父さんとエミリア、護衛のリオンの五人でロビーの大階段を上り、二階へと進んだ。

すると、奥の廊下には二人の兵士が立っていた。

彼らはお父さんを見るなり目を真ん丸にする。

「あなたは……ジル様……！」

「お久しぶりです……！」

「ああ、久しぶり。こちら、ラインツ王国のクラウドイス公爵家のご令嬢、エミリア殿下だ」

お父さんがそう言うと、兵士らは更に目を見開き、サツと片膝を突いた。

僕は思わず「おお……」と声漏れる。

やっばりお父さんもエミリアも、すごい人だ……！

「ああ、良いのです。お立ちください」

申し訳なさそうに笑うエミリア。これなら、ここもきつと顔パスかも……？

4話 ザイラール王国の現状

エミリアの一声でサツと立ち上がった兵士らに、彼女は続けてこう言った。

「本日はお店の手続きの件で立ち寄ったのでお約束はしていませんが、ヨゼフ国王陛下とクリステイーナ王女殿下への謁見は可能ですか？」

途端に、表情を曇らせる兵士二人。

「誠に申し訳ございません。現在、陛下への謁見はたとえラインツ王族のあなた様であっても、叶わない状況でございます……」

ああ、なんか……そんな気がしたんだよなあ。そんなあつさり会えるわけないって、心のどこかでは、そう思っていたんだ。

「えっ、それは、どういうことですか？ ご不在という訳ではなさそうですね？」

そう問うエミリアに、兵士は「申し訳ございません。お伝えすることはできません」と恐縮しながら頭を下げた。

「ちよつと待ってくれ、今回の同盟記念祭の取り決めは、両国王の間でなされたんだよなあ？」

お父さんが口を挟む。

「申し訳ございません、そちらも……」

「……まあ、そうだよな。悪い。なら——エミリア殿下がヨゼフ陛下に親書を渡すには、どういう手続きを踏めばいい？」

お父さんは少し考えながら、言葉を選ぶようにそう言った。

「そうですね……それでしたら、まずは私の方でその親書をお預かりして、アイズフト宰相にお渡

しする形になります」

兵士の一人がそう答えると、お父さんは「……分かった、ありがとう」と言葉を返し、僕たちを連れてその場から離れた。

◇

吹き抜けになっている二階の廊下で一階の賑わいを眺めながら、お父さんがポツリとこう言う。

「……パーシーに、聞いてみるか……」

パーシーとは、パーシヴァルのことだ。

さっきまで国王に会うことに否定的だったお父さんだけど、今は会うことに必死になっている。お父さんから見て普通の状況じゃないって、思ったんだ、きつと。

「……そうですね。ヨゼフ陛下はあんな風に私の謁見を門前払いするようなお方ではありませんでした。それに、親書も直接受け取ってくださらないなんて——」

エミリアもそう言葉を返すと、すぐに魔導通信器を使ってパーシヴァルに連絡を取ってくれた。なんか、思っていたよりもこの国、ヤバい状況かもしれない……

だって、アイズフト宰相って、あのローベル・アイズフト……今回僕たちが懲らしめたい相手だ。以前であればエミリアなら国王と直接やり取りできたのに、今はその人を通さないと手紙のやり

取りすらさせてもらえないってことだもんね……

あれ、国王……無事かな？

それに、クリステイナ女王の件もまるで触れられていない……

『どうした、エミリア？ 今日はずイラール城に記念祭の申請に行くのではなかったか？』

パーシヴァルの声だ。

「お兄様、今、よろしいですか？ はい、現在ズイラール城に来ているのですが、少々お聞きしたいことがあります」

『……私の方は大丈夫だ、言ってみなさい』

ここで、お父さんが割って入る。

「ヨゼフ陛下に謁見しようと思ったが、門前払いをされてしまったんだ。パーシー、ヨゼフ陛下について何か知らないか？」

『……貴様にパーシーと呼ばれることを許可した覚えはないが……しかも、私はエミリアに対して聞くと言っただけであって——』

あーあ、始まった……パーシヴァルって、すごいシスコンだから。

隣でリオンも呆れている。

……と思ったら、すぐに通信器から別の声が聞こえてくる。

『ジル殿、それに関しては余が答えよう』

この声は……！

「『国王陛下——』」

「おじさま！」

「おーさまー！」

ラインツの国王、カール・ラインツ三世だ。ラインツ国王とは元ブライア領主のイーバンの一件以来だな。元気かな。

パーシヴァルは今ラインツ城の玉座の間にいたのか。

『おお、ノエル君もいるのか。おーさま、のこと、覚えておるかね？』

「うん！ 僕のお願いを聞いてくれて、新しいグランキャットを建ててくれたおーさま！」

『ほっほっほ、賢い子だな。覚えていてくれて、おーさま嬉しいぞ……本題に入るが、ヨゼフ国王陛下は前回の同盟記念祭以来、少々心の病をこじらせておられるようだ』

「えっ!? 未だにですか!?!」

お父さんが驚いた様子で問う。

心の病!? それも未だに……?」

『……あくまでもアイズフト宰相はそう言っておる。どうやらそれもあって、現在ズイラール王国は全ての政治をアイズフト宰相が担_かつておるようだ』

「そうですか……」

「ぐるにゃ……」

くろすけは悲しそうに床に伏せた。

「……その、おじさま。アイズフト宰相を疑っている訳ではないのですが……ヨゼフ国王陛下は、ちゃんとご存命なのでしょうか……」

エミリアが遠慮気味にそう尋ねた。

確かに、僕もそれが気になる。もしかして、もう殺されていてローベル宰相がやりたい放題やっているだけなんじゃ……？

『それは心配ない。現に、余だけは見舞いをさせてもらうことができたが、ヨゼフ国王陛下はご存命だ。しかし、完全に塞ぎこんでおられて、余とは一言も口をきいてはくたさらなかった』

「そんな……おじさま、ラインツの王宮回復魔道士に診てもらうことはできないのでしょうか？」

『それは、余もアイズフト宰相に提案したのだ。しかし、ザイラールの回復魔道士だって一流だから問題はない、と突き返されてしまった。その時は少々無礼だとは思うたが、ヨゼフ国王陛下の手前、余もそれ以上は何も言わなんだ』

「そうですか……」

『だが今思えば、どうにも腑に落ちない部分がある。アイズフト宰相は「次の同盟記念祭までにはよくなって、記念祭には顔を出せるでしょう」と発言したのだ。おかしくはないか？ なぜ、何年も患っておられる心の病の回復時期が予測できるのか？』

『確かに、そうですね……』

通信器からパーシヴァルの相槌を打つ声も聞こえてくる。

『その件に関してはこちらでも少し探ってみるとしよう。という訳だから、ジル殿もエミリアも、しばらくはヨゼフ陛下への謁見は諦めてくれ』

「分かりました。教えてくださり、ありがとうございます」

「おじさま、ありがとうございます」

その後、パーシヴァルとエミリアの間で世間話が始まった。

ローベル宰相の裏の顔を知っている僕は、今の話を聞いて、ザイラール国王はなんらかの状態異常か何かで行動を制限されているのではないかと考えた。

そう、お父さんが昔かかった『無気力』の状態異常のような、何か――

その時、近くを通ったザイラール兵たちから、こんな会話が聞こえてくる。

「王女殿下は今日もお祈りをされているのか？」

「そうみたいだぞ。なんなら今も、祈られているんじゃないか？」

「なんて献身的なお方だ……殿下の祈りが届いて、陛下も早く良くなるといいなあ……」

「本当だなあ……」

王女殿下は、今も祈られている……？

どこで？ そこにいけば、クリステイナ王女に会える？

5話 王女との再会

エミリアとパーシヴァルがお父さんとリオンと国王を交えながら世間話を繰り広げる中、僕はくろすけに念話でこう問いかけた。

『ねえ、くろすけ。このお城には、確か礼拝堂れいはうどうみたいなのところあったよね？』

『む、なるほど。ワシの記憶を見た時に見かけたか』

『うん』

『この国には「ザイル教」という国教があつてのう。「女神ミザリエル」を信仰する宗教じゃ。ゆえに、この城にも王都にも、礼拝堂や修道院なるものが存在しておるぞ』

『ザイル教かあ。さつき、あの兵士さんたちが王女は今も祈っているんじゃないかって言ってたけど、一階の礼拝堂でその女神ミザリエルに祈っているのかな？』

『うむ、そうじゃろうな。元々、女神ミザリエルはザイラル王家を守護しておると信じられておる。ゆえに、ワシがまだ城におる頃も、王女殿下はあの礼拝堂で日々献身的に祈りを捧げておった』

『だったら、今パパたちは話に夢中だし、僕たちだけでその礼拝堂を覗いてみよう。もしかしたら

クリスティーナ王女に会えるかも』

『ふむ……そうじゃな。顔を出してみる価値はあるか』

僕とくろすけは顔を見合わせてうなずくと、話に夢中になっている大人たちに背を向けて、一階への階段を駆け下りた。

『その通路に入つてすぐが礼拝堂じゃ』

『おっけー！』

賑やかなロビーを抜けてくるすけの言う通路へと入る。

すると、礼拝堂の入り口には他の兵士よりも立派な鎧を身に着けた兵士が立っていた。

扉は開いているようだけど、その人のせいで礼拝堂の中はよく見えなかった。

『あやつの名は「フィン」というそうじゃ。王女の近衛兵とのステータスが出ておる。それに礼拝堂から、懐かしい気配がするわい』

くろすけはスキルの『観察眼かんさつがん』の結果を念話で教えてくれて、目を細めた。

——この礼拝堂の中に、クリスティーナ王女が……！

「坊や、どうしたのかな？ 迷子かな？」

礼拝堂の入り口でウロウロしていると、近衛兵のフィンに話しかけられる。

「あのね、えっと、僕、ここで祈りできる？」

僕はそれとなくフィンに近づき、礼拝堂の中をチラチラと覗き見る。

すると、確かにくろすけの記憶の中で見覚えのある女の子の後ろ姿が礼拝堂の奥にあった。
『間違いないぞ、ノエル！ 彼女がクリスティーナ王女殿下じゃ！ あの頃と比べると、かなり背
が伸びたのう』

「すまないね、坊や、一般の人は王都の修道院に行ってもらえるかな？」

「どうして？ 僕、ここで祈りしたい。あつ、あそこでお祈りしているの、おーじよ様？ ご挨拶、できる？」

僕はそう言って強引に礼拝堂の中へと入ろうとするが、さすがにフィンに阻まれてしまった。

「そう、王女様がお祈りをしているからね。ここは城の者専用の礼拝堂なのだ。せつかくだけど、坊やは入れないよ」

「いやだ、僕、おーじよ様と一緒に祈りしたい！ おーじよさま〜！ クリスティーナ王女殿下〜！」

ちびつこの特権でなんとか行けないかともがいてみるが、フィンは頑なに通してはくれなかった。そりゃ、そうか。さすが近衛兵……

しかし、僕のそんなあがきが届いたのか、僕たちに背を向けて祈りを捧げていたクリスティーナ王女がこちらを振り返った。

「どなたか、わたくしのことを呼びましたか？」

くろすけの記憶よりも少し大人びていたけれど、まだまだあどけない表情の少女とバチつと視線

が合う。

彼女はなぜか、僕とくろすけを交互に見ると、目を真ん丸にした。

「黒猫を運れた幼い男の子……！ フィン！ その子をこちらへ通してください！」

そう言ってクリスティーナ王女がこちらへ駆け寄って来る。僕のこと、知ってるの……!?

「ええ!? そういう訳にはいきませんよ、クリス様。ローベル様に危ないから一般の者と関わってはならないと、言われているでしょう？ おい、誰かいないか!? 迷子のようにだ、誰かこの子の親を探してくれ！」

フィンがそう言って廊下に呼びかけると、すぐに数人の兵士が集まってきた。

「そんな、フィン！」

「えーっ、僕、迷子じゃないよ！」

「ぐるにゃ……！」

「ダメです。そういう決まりなので、ごめんね、坊や」

申し訳なさそうにそう言うフィン。

僕とくろすけは駆け付けた兵士に抱き上げられてしまった。

「わーっ、やめて、離してよ！」

「ぎにゃー！」

そんな僕へ、フィンに通せん坊されているクリスティーナ王女がこう問いかけてきた。

「ねえ、あなた、お名前は!?」

「僕? ノエルだよ、ノエル・グ——」

——その時、くろすけの念に続きを阻まれる。

『ファーストネームだけでよい! グランヴィルは言わんでよい!』

「!」

「ノエルグ……?」

首を傾げるクリスティーナ王女。

「あつ、えつと、ノエル! 僕、ノエルだよ! おーじよ様!」

「ほら、ノエル君、パパとママを探そうね!」

じたばたする僕を抱えた兵士は、そう言つて礼拝堂からロビーの方へと歩いていってしまった。

「ノエル様……!」

そんなクリスティーナ王女の切なそうな声だけが、背後から聞こえてきた。

6話 チャンスはまだある

兵士に連れられて城のロビーまで戻つてくると、ちょうど申請を終えたところのアイラたちの姿

をとらえた。

『ノエルよ、アイラとジャックに回収してもらおうのじゃ』

そんなくろすけの念話が聞こえてくる。

僕は同じく兵士に連れられているくろすけの方を向いてうなずくと、大きな声で「アイラー!

ジャックー!」と叫んだ。

すぐにアイラとジャックが僕の方を見る。

「ノエル、くろすけ!」

「何やってんだ? アイツら」

驚いた顔のアイラに、呆れた表情のジャック。

ジャックにあんな顔をされるのはちよつと悔しい。

彼らは両親らに何かを話しかけると、こちらへと駆け寄つてきてくれた。

「おや? ノエル君のご両親ですか?」

僕を連れている兵士が問う。

「いやあ、親ではないんだけど、保護者ではあるかな。ノエル、何かやつちやつたのかい?」

アイラが申し訳なさそうに言つた。それに対し、兵士は「いえいえ」と首を横に振る。

「礼拝堂の前で迷子になっていたようなので、保護者様を探しておりました」

「迷子なあ?」

「ありや、そんなのかい。それなら、アタシらが引き取るよ。この子の親とも一緒に来ているからさ」

アイラがそう言うと、兵士はホッと安堵の表情を浮かべた。

「それは良かったです。では、ノエル君、次は迷子にならないように気をつけるんだよ」

「うん……ありがと」

僕、迷子じゃないって言ったのに。なんだか納得のいかない僕だったけど、兵士たちも善意でやっつてることだし、とりあえずお礼は言っておいた。そして、去っていく兵士たちの背中に「バイバイ」と手を振る。

「で、なあにいたずらしてたんだけ？」

ジャックがニヤニヤしながらそう問いかけてきたので、僕は「ひみつ〜」と意地悪く笑って誤魔化した。

「ノエルー？」

「ノエルくん！ いたら返事して〜」

「ノエル〜」

そこへ、二階からお父さんたちも下りてくる。

僕はジャックに肩車してもらってお父さんたちに「パパー！」と呼びかけ、無事に全員が集合した。

アイラたちからは無事に申請が済んだことを聞き、僕たちは国王や王女との謁見はできなかったことを報告した。

◇

用事を済ませた僕たちは王都の酒場で食事をとると、ジャックの両親であるラドクリフ夫妻とはここで別れ、ブライアの町行き馬車へと乗り込んだ。

その馬車内にて、念話で反省会をする僕とくろすけ。

『どうしよう、王女様にも王様にも普通に会えなかったんだけど……』

僕は窓から外を眺めながら、内心落ち込む。

『なあに、初めから全て上手くいくと思っただけだよ。まだ記念祭の準備は始まったばかり。ジャックなんかは親の手伝いで何度もザイラール城を訪れるはずじゃし、まだまだチャンスはある。そう落ち込むでないわい』

『そっか……うん、そうだよ。そういえばさ、僕が王女に名乗ろうとした時、止めたのはなんぞ？』

『うむ。今回のザイラール城訪問で、今はローベルのやつが全ての実権を握っていることが分かったじゃろ？』

『うん。最悪の状況だったね』

『グランヴィル』という名がローベルに届かない方が良いかと思つてのう。決して王女殿下を疑つておるのではない。フィンという名の近衛と、駆け付けた兵士ら、どこまでローベルの息がかつておるか分からん以上、慎重になるべきじゃ』

『あつ、そつか……ローベルにグランヴィルを警戒されちゃうと、パパや僕が出禁になっちゃうかもつてことか……』

『うむ。むしろそれで済めば軽い。あやつのことじゃから、例えばあることないこと言つて、ジルに関わつておるエミリアを持ち出して国際問題に発展させるようなこともしかねん。今後、グランヴィルの名は簡単に出さん方が良いじゃろう』

『あわわ、そつか。ごめん……うかつだった』

『いや、幼いお主にここまでさせねばならぬワシの責任じゃ。気にするでない。それよりも、グランキヤットに帰つたら今後の作戦を立てるぞ』

『今後の作戦？』

『うむ。もう正攻法での王女殿下との合流は不可能に近いことが分かつたからのう』

『そうだね……よし、次に大人の誰かがお城に行く時まで、なんか良い方法を見つけなくちゃつてことだね。僕、まだまだ諦めないぞ！』

『うむ、その意気じゃ』

初めて訪れたチャンスは、ザイラールがローベルに支配されてしまつていたことで失敗してしまつた。

でも、まだチャンスは残されている。

それに、王女は僕の名前は知らなかつたみたいだけど、僕にすごく興味を示していた。

それも気になる。

王女が最後に「ノエル様……！」と切なそうに僕の名前を呼んだのが、まだ耳に残つてもいる。

だから僕は、絶対にクリスティーナ王女に会うんだ……！

7話 偶然の戦利品

翌日にはアイラの両親であるツシロ夫妻もシラナミの村に帰り、鍊成堂グランキヤットには日常が戻つてきていた。

僕とくろすけは、僕の自室で難しい顔をしていた。

『うーん……何か良い方法ないかな？』

『ぐぬぬ、なかなか難しいのう。礼拝堂で祈つておられる時には絶対にフィンとやらがついておるし。う』

「うーん、他にお城の中を歩き回るようなことってないのかな？」

『昔であれば意味もなく元気に城中を走り回っていたのじゃが……今はローベルの目もある。自由に歩き回ることもままならないじゃろうな……』

「だったらもう、なんとかして王女様のお部屋に忍び込むしか……」

『それができたら苦労せんのじゃが……』

僕たちは行き詰まっていた。

次に大人の誰かがザイラール城に行く時までには、クリステイナー王女に会うための何か良い方法を考えなくちゃならないんだけど、それがなかなか思いつかなかった。

くるすけと一緒に床に脱力して意気消沈していた、その時だった――

「こんにちばー！ ノエルいますかー？」

一階から、そんな元気な青年の声が聞こえてくる。

この声は――トーマ兄ちゃんだ！

そういえばアイラの両親はシラナミの村に帰ったけれど、兄弟たちは向かいの宿屋に泊まって冒険者ギルドに通っているんだったつけ。

その後、階段を上ってくるたくさんの足音が聞こえた。

僕は部屋の戸を開けて、彼らを出迎える。

「みんなー、いらっしやーい！」

「にやあ♪」

「やあ、ノエル、くるすけ！」

「遊びにきたわよ♪」

トーマ兄ちゃんにリン姉ちゃん。

「わーい！ ギルドのお仕事は今日はおしまい？」

僕がそう尋ねると、クーガ兄ちゃんがこう答えてくれた。

「うん、今日はもうおしまい。今日な、依頼で初めてダンジョンってやつに潜^{もぐ}ってき、なんかすご

そうな物を手に入れたんだよ」

「えっ、ダンジョン!? うわあ、良いなあ。なになに、何をゲットしたの？」

「じゃじゃーんー！」

ニーナとルーナが持っていた麻袋から一緒にカラフルなトカゲの尻尾^{しっぽ}を取り出した。

「えーっ！ 綺麗な尻尾！ 魔物を倒してドロップしたやつ？」

「そう。なんかカラフルな模様のトカゲみたいな魔物を倒したら落としましたのよ」

リン姉ちゃんが答える。

「あの魔物一回しか遭遇^{そうちう}しなかったし、やつばレアな魔物だったのかな？」

そう言うクーガ兄ちゃんに、ニーナとルーナが「そうだよ、レアだったんだ〜」と続いた。

「すごいなあ、見せてくれてありがとう♪」

珍しいものを手に入れたから、僕に見せに来てくれただけかと思っただけけど、ニーナとルーナは持っていたその戦利品をそのまま僕へと差し出した。

「はい、どうぞ♪」

「ノエル君にあげる〜♪」

「えっ!? ぼ、僕にくれるの!?!」

もらえるだなんて一ミリも思っていなかった僕は、驚いて目を見開いた。

「ニーナとルーナにくろすけのぬいぐるみくれただろ? それのお礼だ。俺らは珍しそうなもんを見つけられただけで満足だからな」

トーマ兄ちゃんと言う。さすがアイラの弟。アイラと似たようなこと言うな……

「これだよー!」

「可愛いからお気に入り〜!」

ニーナとルーナはそう言って腰に付けているくろすけのマスコットを見せてくれた。喜んでくれているみたいで良かった。

「そっか……じゃあ、トーマ兄ちゃんとリン姉ちゃんとクーガ兄ちゃんにはこれをあげる。これと交換だね♪」

僕はそう言ってポーチの中から属性魔法が込められた玉、通称魔法玉まほうたまたまを取り出し、三人に手渡す。これを使えば魔力を持っている人なら誰でも魔法が使えることを伝えると、三人とも大喜びして

いた。

その後、みんなは冒険者ギルドで体験した依頼の話を聞かせてくれると、満足そうに向かいの宿屋へと戻っていったのであった。

みんなが帰った直後、くろすけがこう念を送ってくる。

『……ノエルよ。やつらは、とんでもないお助け素材を置いていってくれたやもしれぬぞ』

「えっ、どういうこと!?!」

『この素材は「レインボーカメレオンの尻尾しっぽ」と言ってる。その名の通りレインボーカメレオンという魔物からドロップするレアアイテムじゃ』

「わ、やっぱりレアアイテムだったんだ」

『うむ。やつらがどの程度の難易度のダンジョンに潜っておったのかにもよるが……レインボーカメレオンに遭遇できて、しかも素材までドロップしたのは、かなり幸運なことじゃ』

「えっと、じゃあ……そのレア素材が、お助け素材っていうのは?」

『実は、このレインボーカメレオンの尻尾じゃが——「変身薬へんしんぐすり」の素材になる』

「変身薬……あーっ! くろすけが黒猫に変身した時に飲んだやつ!?!」

僕はくろすけの過去の夢を思い出し、そう叫ぶ。

『これ、ノエルよ、声大きいぞい』

「あっ、ごめ——でも、変身薬が作れたら、僕もにゃんこに変身できる?」

『うむ。想像した小動物になることができる』
「それで、くろすけの時みたいにお城の通気口を進んで……!」
僕は、興奮を抑えるように小声で言う。
『クリスティーナ王女殿下のお部屋へ直に突入じゃ!』

8話 子どもな大人

くろすけから聞いた変身薬の素材は、レインボーカメレオンの尻尾以外の物は全て揃っていた。そのため、早速錬金布を広げて変身薬を二つ生成した。

「くろすけの言った通り、二つ作ったよ。一つはくろすけの分?」

僕がそう尋ねると、くろすけは首を横に振った。

『いやいや。その変身薬は二つともお主の分じゃ。先ほど変身薬の効能は説明したじやろうて』

「えっと、変身薬は魔力を使って身体の見た目を変化させる薬——」

僕はここまで呟き、ハツとする。

「あっ、くろすけには魔力ない!」

『そうじゃ。というかワシは別にこの黒猫の姿のままでも問題はないしのう』

「確かに」

『変身薬の変身の効果は人によって差異はあるが、だいたい一時間程度じゃ。王女殿下の部屋に無事にたどり着けたとして、変身薬の効果を一度切らさないと王女との意思疎通は不可能じゃ。ゆえに、変身薬を二つ作らせたのは、行き用と帰り用じゃ』

「そっか。変身薬で変身している間は、しゃべることができないのか……僕たち二人の間でなら念話で話せるのにな」

『うむ。これを飲むのは次にザイラール城に行った時じゃぞ。ひとまずはこれで準備は完了じゃな』

「おっけー!」

僕たちは向かい合っとうなずくと、次のチャンスこそは、と気合いを入れた。

◇

——十日後。

僕とくろすけはジャックがザイラール城に行く用事ができたので、それに便乗することに成功した。

リオンの愛馬シュヴァリエを借りて、あつという間にザイラールの王都ザイディアへと到着。

すると、ジャックから、なんともちよいだいい提案を受ける。

「なあ、せっかくだろすけと一緒に来られたんだからよ、城での用事が済んだら、また案内、してくれよ」

ジャックはニヤツと不気味に微笑んだ。

「案内？ どこに？」

僕が首を傾げると、ジャックは「分かるだろ？ あの場所だつて」とモジモジしていた。くろすけが僕の足をちよんちよんと突いてくる。

『ノエルよ。きつと記憶の万華鏡の素材を集めている時に行った地下闘技場のことじゃろう。あそこへの道は酷く入り組んでいて、ワシの案内がないと、たどり着けんからのう。これは好都合すぎる。ワシらはその間に城でやりたい放題できるぞ』

「あつ、地下闘技場のことかあ！ じゃあ、僕たちはその間お城を探検してるけどいい？」

「おうおう、好きにしろよ。また迷子になったら保護者がもうすぐ来るつて言つとけ」

ジャック、いい加減だなあ。だけど、今はそのいい加減な感じが助かる。

「おっけー」

「にゃ」

「ありがとよ！」

幼児と猫とおじさんで固く握手を交わすと、僕たちはまずはザイラール城へと向かった。

ジャックのお城での用事を済ませると、今度はジャックを地下闘技場まで送り届ける。彼はまるで少年のように目をキラキラとさせながら、受付へと走っていった。

『ほっほっほ。まるでどつちが保護者なのか分からんのう』

「あはは、本当に……」

僕たちは再びザイラール城まで駆け戻る。

「はあ、はあ、もう、地下闘技場とお城を往復するなんて、一体なんのトレーニングだよ……！」
僕はお城のロビーの片隅で、膝に手を突いて呼吸を整えた。

そして、人気がなく、近くに通気口のある通路へと入り込んだ。

9話 親子？

『さて、ノエルよ。ここなら今のところ人の気配もない。なりたいた小動物を想像しながら、変身薬を一気に飲み干すのじゃ』

僕はうんとうなずいた。

僕がなりたいた小動物なんて、もうそんなの一つしかない。

変身薬のコルク栓をきゅぽつと外し、一気に飲み干そうと口を含む。

「ぶほっ！」

なにこれ!? めっちゃマズイ!

たとえるなら、雑巾ぞうきんみたいな味。雑巾食べたことはないんだけどね。

『ノエルよ! 我慢じゃ! 一気に飲み干さんと意味がないぞ!』

そういえば、くろすけも心の中で『まずっ』って言いながら一気に飲み干してた。

僕は覚悟を決めて、鼻をつまんで一気に飲み干した。ちなみに、こんな味だけど、健康上は特に問題のない成分らしいよ。

「はあ、死ぬかとおもっ——!?!」

僕の魔力が、身体中を一気に駆け巡る。

すると視界がどんどんと低くなっていき、廊下の窓に映る自分の姿は、全身金色の毛の子猫になっていた。

「みゃっ♪」

子猫だからか、くろすけよりもずっと高い声が出た。

『わあっ! 僕、猫みたいに鳴いた!』

『猫みたいにじゃなくて、お主は今猫なのじゃ! しかし、猫を選ぶとは……』

『そりゃ、毎日くろすけ見てたら、猫って良いなあって憧れるから。よし、変身薬の効果が切れる前に王女様のお部屋にたどり着かなくちゃ』



僕はそう念を送って、くろすけの背中に飛び乗った。

うわあ、くろすけは短毛の猫だけど、ふわふわのもふもふだ！ あったかい！

『むむつ、なんじゃ、まるで親子じゃな……まあ、よい。しつかり掴まっておれ』
「みゃー！」

くろすけは通気口のフタをカリカリと外し、中へと入り、また手でフタを引き寄せて元に戻した。

『うわっ、めっちゃ埃っぽい』

『そりゃ、通気口なんぞ誰も掃除せんからのう。ちよっと我慢せい』

『うん、そうだね……』

くろすけは通気口の中を迷うことなくズンズンと進んでいく。そして、一旦ある通気口から廊下に出ると、目の前にあった階段から上の階へと上がった。

『わあ、これなら見張りの兵士さんのいないところを選びながら上に行けるね』

『うむ。今は一般人に通られたくないところは全て見張りで塞がっておるからのう。こうすれば、安全に登っていける』

『このまま王女様のお部屋まで一直線？』

『いや、先に国王陛下の状態を確認していきたい。体調が優れぬのであれば、おそらく玉座の間の奥にある寝室で養生されておることじやろう』

『そっか、そうだね。くろすけなら、本当に心の病気なのかどうか、判断できるしね』

『うむ。陛下の寝室に直接忍び込んで、状態を治して差し上げることができれば一石二鳥じゃな』
——しかし。

くろすけが進んだ先は、金網かなあみが設置しており、これ以上先に進むことはできなかった。

『ぐぬぬ。ダメじゃな……そうか、陛下の寝室にはネズミ一匹侵入できんようになっておるのか……それに、この金網、ただの金網ではない』

『まさか、魔導具……？』

『うむ、察がいいのう。触れた物に電撃を浴びせるトラップ魔導具じゃ。お主が前に作った静電気を発生させるものよりも、ずっと威力の高いものじゃ。ここから先に行くのは不可能じゃな』

僕はそうなった時を想像し、ブルブルと身震いした。

『うう、こっわ……じゃあ、王様を確認するのは無理ってことか。ねえ、これが王女様の部屋の前にもついたらどうするの？』

『ふむ、この魔導具は定期的メンテナンスの必要があるゆえ、そういくつも設置してはなさそうじゃが……ないことを祈って行ってみるしかないのう』

くろすけは来た道を引き返し、分岐点をさっきとは違う方向へと進んで行く。
すると、通気口の出口なのか、部屋の明かりが漏れてきていた。

『このお部屋、そう？』

僕がそう尋ねると、くろすけは慎重に出口から部屋の様子をうかがった。

『うむ。間違いない。鑑定眼にクリスティーナ王女殿下のステータスが映り込んだ。ここが王女殿下のお部屋で間違いない。あのフィンとやらも今はこの部屋にはいないようじゃ。チャンスじゃ!』

「……この声は！ ノエル様、黒猫ちゃん、どこかにいるの？ いたら返事して!」

「みゃ!?!」

「ぎにゃ!?!」

クリスティーナ王女のそんな声が聞こえてきて、思わず驚いて鳴き声を漏らす。

——だって、僕たち今、念話でしか会話していなかったはず……

10話 女神の神託しんたく

クリスティーナ王女に通気口のフタを開けてもらい、王女の部屋へと入れてもらう僕たち。

「あら？ 黒猫ちゃんと一緒にいたのは、ノエル様ではなく金色の子猫ちゃんだわ」

曇りなき眼で首を傾げるクリスティーナ王女。

彼女には僕たちの念話が聞こえているようなので、僕は思い切つてこう話しかけてみた。

『僕がノエルだよ。どうしても王女様に会わなくちゃいけなくて、猫の姿に変身して来たんだ』

「変身薬……ゼオルが黒猫の姿になった時に使った物と同じものですね……あなたは、ノエル・グ

ランヴィル様というのでしょうか？ やはり、ゼオルやジルと血縁関係なのでしょうか……?」

僕がグランヴィルだということも知っている。あの礼拝堂で会った時の、くろすけの念話も聞こえていたということだ。

『むむ、あの時のワシの念話か……!』

くろすけが苦い表情を浮かべる。それに対し、クリスティーナ王女は慌ててこう付け足した。

「ご安心ください。あの時はなんでもないように振る舞い、黒猫ちゃんから声が聞こえたことは、フィンにも誰にも話してはいません。本当です、信じてください。それに、扉には力ギをかけてありますので、廊下にいるフィンが勝手に入ってきてしまうこともありません」

『ご配慮いただきありがとうございます。もちろん、信じますとも』

くろすけが念話でそう返すと、クリスティーナ王女はホッと安心した表情を見せた。

ここで、僕は彼女からの質問に答える。

『えっとね、血は繋がってはいないけれど、僕はジルの息子だよ。それで、こっちはくろすけ』

「まあ、ジルのご子息でしたか。くろすけちゃんですね、承知しました」

『くろすけちゃん……』

ちゃん付けで呼ばれたのは初めてなのか、くろすけは微妙な顔をしていた。

『それにしても、人に念話を感じ取ってもらえるのは初めてだよ』

「わたくしは女神様からの神託を受け取れるため、その念話というのにも対応できたのかもしれないま

せん」

『女神様からの、神託?』

もしかして、神のお告げって、やつ……?」

『おお、国王陛下のように、王女殿下も神託を受け取れるようになったのか』

くろすけが感心したようにそう念話を送ってくる。

「くろすけちゃん、王族のことをよくご存じですね。神託というのは、女神ミザリエル様からのお告げになります。我々ザイラル王家の者が、代々受け継ぐ能力になります」

『おお、すごい……!』

僕はテンションが上がって「みゃー♪」と鳴く。クリスティーナ王女は「ふふふつ」と微笑みながら僕の頭を撫でてくれた。

そして、彼女はこう切り出す。

「わたくしは、五歳の頃に初めて神託を受け取りました。その時受け取った神託は『黒猫を連れて幼い男の子が現れるまで、行動を起こさず耐えよ』というものでした」

『黒猫を連れて幼い男の子……僕のことだ。だから、あの時王女様はあんなに必死になってくれたんだね』

てっきり僕のことを知っているのかと思っただけど、そうじゃなかった。女神さまのお告げと僕の特徴が合致していたんだ。

それから僕たちは、自己紹介や、お父さんが今は隣国のブライアの町で錬金屋をしていること、少し前にあった元ブライア領主の悪事を暴いた話なんかをした。

クリスティーナ王女は終始興味津々に聞いてくれていて、記憶の万華鏡を作るための素材集めの旅の話の時なんか「いいなあ、そんなに色んなところに行けて、うらやましいです」と何度も言っていた。

すると、僕の容姿が子猫から元に戻る。

「あつ、戻った」

「まあ、本当ですね。変身薬ってすごい……!」

ここで、クリスティーナ王女は少し考え、やがてこう言った。

「その記憶の万華鏡とは、対象の記憶を別の対象と共有できるといふものでしたね。あまり気持ちのいいものではございませんが、どうか、わたくしの記憶を共有してください。この国の闇を、分かっていただけだと思います。それが、私が受けた神託の意味なのでしょう」

記憶の万華鏡を作った理由は、まだ彼女には話していない。そのため、僕たちがローベル宰相を疑っていることもまだ知らないはずだ。

きつと、この国の闇とはローベル宰相のことを言っているのだろう。

それを確かめるためにも、僕とくろすけは大きくうなずいた。

11話 あめの時の王女サイド

僕たちは記憶の万華鏡を使って、クリステイーナ王女の記憶を体験する。場面は、ザイラール城の廊下から始まった。

リッチを呼び出して使役するアイテム『リッチの宝玉』ほうぎよくを啜くえた黒猫とローベル宰相が、足早に廊下を駆け抜けていくのを目撃する。

なるほど、これは……あの時の……正直あんまり見たくないシーンだ。だって、この後、僕のおじいちゃんは――

『ローベルが、にやんにやんと追いかけてこしてる？ 迷子のにやんにやんかな？ 良いなあ、わたくしも、にやんにやんと遊びたいわ』

今よりも少し幼いクリステイーナ王女の、心の声が聞こえてくる。

そして、彼らを追いかけて下へ下へと下っていくと、問題の『王家の地下空洞』おうちけ ちかくうどうへとやってきた。

「ローベル？ にやんにやんと追いかけてこ、ずるいわ。わたくしも、にやんにやんと遊びた――」

そう意気揚々とやってきた彼女の視界に映ったのは、不気味な魔道士のような魔物、リッチ。

「えっ、お化け!? 助け――」

◇
ここで一旦視界が真っ暗になった。リッチが怖すぎて気絶しちゃったんだよね……

『あれ？ わたくし、そうだ、あのお化けにびっくりして……』

意識は取り戻したけど目は開けてはいないようで、まだ視界は真っ暗だった。

「王女の命が惜しくば、リッチに自分を殺すように命令をしろ」

そう言うローベルの声が聞こえてくる。

『えっ、なに、どーいうこと!?!』

慌てた彼女の心の声が聞こえると、視界が少しだけ開ける。薄目を開けているのだろう。

『首が、冷たい……えっ、これ、ナイフ……!? ローベルが、わたくしにそんなことしてるの……!?!』

そして、細い視界には、僕のおじいちゃんであるゼオルが映る。

『ゼオル……!?! あれ、にやんにやんじゃない……!?!』

「……リッチよ、私を殺せ――」

『嘘……!?! ゼオルが!? わたくしの、せいで……??!』

その瞬間視界がギョッと暗くなる。目をつぶったんだ。